

## 日韓がともに生きる起点となれ

森山新（お茶の水女子大学）

「日韓大学生国際交流セミナー」は、今年で13回目を数え、戦後ヨーロッパを戦争から共生へと導いた「複言語・複文化主義」の考え方にに基づき、韓国の言語と文化を学び、日本の言語と文化を教えながら、東アジア人としての国際的な人材を育成するプログラムとして実施されている。

今回の学生たちは、初めての教育実践にもかかわらず、初めてとは思えない堂々とした態度で、実践を行っていた。その背景には皆が実習に備え一生懸命準備した結果であるに違いない。また今回参加した8名のうち7名は学部生で、彼らは日本語教育副プログラムの「日本語教育法演習」か、グローバル文化学環の実習科目「多文化交流実習」でこのプログラムに参加しているが、今年度は7名のうち5名が「日本語教育法演習」で参加していることが、学生の関心を日本語教育実習に向けている原因となっているのかもしれない。またそれに加え、回を重ねるごとに、事前学習、指導教員の指導、報告書などを通じた情報提供（教案、資料の作り方など）が功を奏してきたのかもしれない。

今回の実習授業では、前半に学んだ韓国語の知識を活用していた学生が何人かいた。学習者の母語に対する理解は学習者の置かれた立場を理解する上で重要であり、それを教師が活用するという事は、学習者にわかりやすい説明を提供したり、まちがいがやすい点に注意を向けたりでき、教育の向上につながる。また自身の学習者としての経験、とりわけ学習者の言語を学ぶ経験は、目の前の学習者のおかれた様々な状況や苦勞を知る上でも重要である。さらに、単に実習生たちが自分は「教える者」として立場を固定することなく、ある時は教え、ある時は学ぶという双方向の立場に置くことで、お互いを対等に見つめることにもつながる。これは、互いの人権、言語、文化を尊重する民主主義的な市民性（シティズンシップ）の育成にもつながる。その意味で、本学が前半にまずは学習者の言語を学び、その上で日本語教育実習を行うという複言語・複文化プログラムとして実施していることは、外国語学習、異文化理解、教育実習に加え、言語・文化を超えたシティズンシップ教育として、非常に意義があると言えよう。本プログラムを履修した学習者が、ある者は日本語教育者として、またある者は東アジアの交流、外交に関わる者として成長していくこととなろうが、ここで学んだ言語・文化を超えたシティズンシップを発揮し、東アジアがともに生きるための役割を果たしてほしいと切に願っている。

釜山外大とは2016年に国際学術交流協定が締結されたが、交流は2007年より始まっていた。2007年から毎学期TV会議システムを活用した国際合同遠隔授業を行い、両国に横たわる様々な問題、ステレオタイプ、コンフリクト、アイデンティティなどを日常的に取り扱ってきたのをはじめ、2011年度からは、東日本大震災に端を発し、釜山外大からも学生を招き、世界8か国の学生が本学に一堂に会し、毎年「国際学生フォーラム」を開催、世界の災害に若者は何ができるかを話し合った。2015年には、戦後70年、日韓国交回復50周年を記念し、本学の学生35名を連れて釜山外大を始め韓国の3つの大学を訪問し、両国の過去、互いの良さ、そしてともに歩む未来について話し合った。そうした両大学による一連の歩みの上に立っているからこそ、この「複言語・複文化プログラム」は、対立多き日韓と東アジアに、ともに生きる基盤を築く、新たな試みとして定着していくことを願いたい。

このプログラムが依って立つ「複言語・複文化主義」は、他の言語・文化を学ぶことを

通じ、母語と母文化を中心に今まで当然視していた価値観を相対化し、他の文化に関心と敬意を持つことで、ナショナリズムを克服し、ヨーロッパが、そしてアジアがともに生きるためのインターナショナルなアイデンティティ構築に寄与するとされている。もちろん、知識として、またスキルとして他の言語・文化を学ぶだけで、このような変化を引き起こすことは難しいであろう。しかし、それを積極的に促す交流の場を提供し、お互いに対する愛情と尊敬の気持ちを育み、正しい知識とナショナリズムを超えた視点に基づいて相互理解を深め、実際の行動を伴う全人的な交流を通じてであれば、対立を和解に、そして共生へと導く変化は着実に起こりうるということを今回のプログラムを通じて痛感している。

釜山の地はこれまで、日本と韓国の間であって、いくつもの悲しみといくつもの喜びを経験してきた。豊臣秀吉の時代にはどこよりも先に日本の被害に合い、その後徳川幕府の関係修復により、朝鮮通信使派遣の起点となった。しかし植民地時代には、歌「釜山港に帰れ」にあるように、多くの民が日本へと連行される、悲しい別れの舞台となった。そうした悲しみを乗り越えながら、釜山は今、日本と韓国、そして東アジアをつなぐ基点として生まれ変わろうとしている。釜山外大には「アジア共同体研究所」が設けられ、毎年「アジア共同体論」という授業が行われている。また釜山外大は、ヨーロッパが欧州共同体建設のために策定した「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」の指導法をいち早く採用し、日本語教育を行っている。私が釜山外大に注目し、協定締結にこぎつけ、交流を開始した理由がそこにある。

今回築いた重要な一步を、今後さらに発展させ、近い将来、東アジアがともに生きる未来をこの学生たちの手で作りあげられることを祈り、期待してならない。

今回、このように貴重な進歩を遂げることができた背景には、様々な形でプログラムを提供して下さった、釜山外大の鄭起永総長、日本語創意融合学部 of 諸先生、国際交流チームのスタッフのご尽力があつてのことである。この場を借りて心から感謝したい。